

信濃の名将

村上義清



Yoshikiyo Murakami A MAN WHO BROKE "SHINGEN"

戦国最強の武将・武田信玄を二度破り
川中島の戦いを導いた男

長野県 坂城町
ステキさかき観光協会

郷土の名将 村上義清が辿った軌跡を追う



葛尾城跡から坂城町を望む

義清の居城「葛尾城跡」への登山口



信濃侵攻を狙う武田信玄の進軍を食い止め、「信玄」「謙信」両雄が火花を散らす「川中島の戦い」のきっかけをつくった武将・村上義清。その名は、戦国最強と呼ばれた武田信玄を、二度も破ったことで知られています。

ここでは、戦国史上における義清の登場から、川中島の戦いが起こった経緯と義清の活躍、そして未だ明らかになっていないその最後までを紹介します。

上 義清登場とその舞台

信濃村上氏

村上義清を輩出した村上氏は清和源氏の出身とされ、村上郷（坂城町）に発祥し、建武中興時代に畿内で活躍した村上義光や信濃惣大将として守護と同等の権力を握った村上信貞を世に送り出しました。この信貞時代後に村上氏の本拠地となる坂城郷（坂城町）や塩田庄（上田市）を領有しています。

その後、国人領主として勢力の拡大を進めた村上氏は、応永七年（一四〇〇）、信濃を二分して行われた「大塔合戦」で、当主村上満信が国人一揆側の盟主としてこの戦いに臨み勝利しました。村上氏は名実ともに信濃を代表する領主へと成長していったのです。

一五世紀半ば、応仁の乱を契機とする戦国騒乱の幕が開ける



村上氏発祥の地「島」

なか、村上氏は更なる領土拡張の動きを強め、北・東信濃最大の戦国領主へと成長し、義清の時代を迎えることとなります。

義清登場 海野平合戦

村上義清が歴史の表舞台に登場したのは天文一〇年（一五四



稲荷大明神へ奉納された絵馬。馬上で戦う義清の姿が描かれている。

一）でした。義清の生没年について確かなことはわかりませんが、亡くなったのは元亀四年（一五七三）、享年七三歳だったといえます。

天文一〇年は五月に小県郡の海野地方（東御市海野）で大きな合戦がおこなわれました。古くからこの一帯を治めていた海野氏に対し、小県郡へ勢力拡大を進めていた村上氏は、甲斐の武田信虎、諏訪頼重と連合して海野氏を攻めました。この戦いは、三者による連合軍が勝利し、海野幸義は戦死、後に義清の仇

敵となる真田幸隆（幸綱）は海野棟綱とともに上州の関東管領上杉憲政を頼りました。この戦いで小県郡一帯は村上氏の勢力下となり、義清にとって絶頂の時代が訪れました。

義清登場当時の 周辺状況

村上義清と同時代を駆け抜けた武田信玄、上杉謙信は義清より後年に誕生しました。

義清との対決に至ります。

一方、越後の長尾景虎以後、上杉謙信と表記は、守護代長尾為景の子として生まれ、上田原の合戦のあった天文二十年（一五四八）頃、兄晴景から家督を相続しました。謙信は関東管領上杉氏を庇護したことから、関東へ何度も出兵し、後に上杉姓と関東管領職を継承します。川中島への出陣や隣国越中への派兵など、その人生はまさに戦いの連続でした。

甲斐国は信玄の父信

虎の時代に統一され、その後の領地拡大の場として、小領主が乱立する信濃が標的となりました。海野平合戦は信虎が佐久地方に侵入してきた結果生じた戦いでした。海野平から帰国後、信虎は晴信（以後、信玄と表記）によって駿河へ追放され、信玄が武田家の家督を継ぎました。信玄も父同様信濃への侵略を進め

上

義清と信玄 激突する両雄



武田信玄像

武田信玄の 信濃侵攻

武田家の当主となった信玄が信濃侵攻の最初の標的にしたのが諏訪郡の領主諏訪頼重でした。家督を継いだ翌年の天文十一年（一五四二）、信玄は諏訪氏を滅ぼし諏訪郡一帯を支配下におきました。諏訪平定後、信玄は

上田原の戦い

天文十七年（一五四八）二月一日、村上義清と武田信玄は上田原（上田市）において激突し

諏訪に接する上伊那郡一帯を支配し、佐久郡への本格的な攻略をはじめます。佐久郡の有力者大井氏は、天文十二年に当主貞隆が小県郡長窪城（長和町）で信玄に生け捕られ、貞隆の子貞清も内山城（佐久市）で信玄に降伏しました。佐久地方で最後まで抵抗した主臂城主（佐久市）笠原清繁も、最後は城兵三〇〇人とともに討ち死にし、城は陥落しました。佐久郡一帯が信玄の勢力下になったことで、小県郡を支配していた村上義清は領域が接することになり、両雄が直接対決する上田原の戦いへと進みます。



「上田原の戦い」の主戦場付近

ました。葛尾城から直線距離で一〇キロもない上田原は、義清にとつて地の利を知り尽くした場所でした。一方、武田軍は遠征による疲労も蓄積し、戦いは義清側が勝利しました。この合戦で武田方は板垣信方をはじめ、甘利虎泰、才間河内守、初鹿野伝右衛門といった有力な武将が討ち死にし、信玄自身も傷を負いました。上田原の勝利は武田

家の占領下にあった武士たちを勇気づけ、各地で反武田の狼煙があがりました。義清も諏訪や佐久に攻め入り、武田家の信濃侵略を一時的に後退させました。しかし、上田原の勝利から五カ月後、信濃守護小笠原長時が塩尻峠で信玄に敗れ

ると、武田軍は再び息を吹き返すし、信玄の信濃侵略が再開されます。

砥石合戦

塩尻峠の合戦で勝利し、態勢を整えた武田信玄は、守護小笠原長時を松本平から追い出し、天文十九年（一五五〇）再び村上義清を討つために出陣しました。信玄は義清の属城である砥石城（上田市）を攻撃しますが、

このとき義清は高井郡の高梨氏との戦いのため出陣していません。義清は高梨政頼と和睦すると、砥石城の救援に向かいました。義清来援の報を受けた信玄は砥石攻略を断念し退却をはじめますが、この退却時に村上勢の追撃を受けた武田勢は、横田高松をはじめ千人ばかりを失い

葛尾城陥落 再奪取

ました。「砥石崩れ」といわれるこの戦いに勝利した義清は佐久郡へ侵攻し、一方で長時の旧領を回復するため松本平へも兵を出しました。しかし、天文二〇年五月、砥石城が真田幸隆によつて落城すると、信玄は義清攻略に向けた動きを開始しました。

葛尾城の歩み

復し、塩田城で再起をはかりました。

村上氏の居城葛尾城が落城した天文三年（一五五三）四月九日は、葛尾城の名がはじめて文献上に登場した日で、それ以前の城の歴史は不明です。建武二年（一二三三）、薩摩氏は「坂城北条城」に立てこもり抵抗しましたが、この城については場所も築城年代も不明で、葛尾城との関係はわかりません。村上氏が葛尾城を居城としたのは村上郷から坂城郷へ本拠地を移してから以降のことと考えられ、

その時期を『埴科郡誌』では元中元年（一三八四）あるいは元中九年頃としています。諏訪上社の祭祀記録から応仁年間（一四六七～六九）頃のことと考えられることもできます。葛尾城は村上氏が武田氏に敗れた後も半世紀近く使用され、最後に登場したのは慶長五年（一六〇〇）のことでした。その後、一国一城令の布告で城としての使命は終わったと考えられます。



三水城

狐落城



葛尾城跡の現況

図中の「堀切」とは、尾根を横断するように深い堀を掘った防御施設です

葛尾城落城にまつわる秘話 筭の渡し



天文二二年四月の葛尾城落城の折、村上義清の奥方は千曲河原に下り、川を渡つて力石へと落ち延びようとした。敵軍が迫り来るなか、無事対岸まで船で送ってくれた船頭にお礼として奥方は髪にさしていた「筭」を渡り賃として贈ったことから、以来、この渡し場を「筭の渡し」と呼ぶようになったといわれています。筭橋付近が「筭の渡し場（力石の渡し場）」と考えられています。



砥石合戦錦絵

川中島そして
義清の最後

玄は義清攻略のため再度出陣し各地の城を攻略しながら塩田城に迫りました。武田軍の侵攻に動揺した村上勢は戦意を失い、

の一六の小城が戦わずして落城しました。義清は塩田城を脱出して上杉謙信に救援を求めました。謙信は軍勢を信濃に入れ、

た。合戦後、義清は所領を完全に失い、謙信のもとに身を寄せていったと思われます。弘治三年（一五五七）の第三回の戦いの後、信玄は信濃守護となり飯山領を除く国内の大半を支配下におきました。永禄四年の第四回の戦いで、義清は他の信濃衆とともに先陣として出陣し、八幡原やっぺんがはらの激戦では海津城かいづ（長野市松代）からの武田軍の出撃に備え、妻女山さいにょさん近くの赤坂表に陣取ったとされます。この戦で義清がどのように活躍したか不明ですが、六〇歳をこしてお信濃

天文二年（一五五三）から
永祿七年（一五六四）まで二二
年間、五度にわたる川中島の戦
いで、村上義清は永祿四年の激
戦といわれた第四回の戦いまで
参加したとされます。

越後での義清
そして終焉

みです。天正元年（一五七三）
 二月、村上国清は謙信から亡
 父義清の所領越後山浦領（新潟
 県阿賀野市域）四万貫と信濃飯
 山領を安堵あんどされました。国清は
 上杉家の一門山浦氏の名跡を継
 ぐことから、山浦領と村上氏
 との関係は義清の代からあった
 としてもおかしくありません。
 義清の終焉について、水戸村
 上家の史料では元龜四年（天正
 元年、一五七三）正月一日、山
 浦の地で亡くなったとしていま
 す。一方、義清は永祿八年に越
 後根知城主（新潟県糸魚川市）
 となり、その地で亡くなったこ
 とが通説として知られています
 ほかににも終焉の地として、越後
 五智ごち（新潟県上越市）、越後赤沢
 城（新潟県津南町）、上総国宮
 原（千葉県市原市）などありま
 す。義清の墓あるいは供養塔に
 ついても、越後の根知、五智光
 源寺、赤沢、信濃では芋川いもがわ（飯
 綱町）、田町（坂城町）の五ヶ
 所あります。義清の終焉地はわ
 かりませんが、宿願であった故
 郷坂城への帰国はついに叶わず
 異国の地、越後でその生涯を終
 えたと考えられます。





A photograph of a traditional Japanese wooden shrine building, likely a Torii or a similar structure, featuring a tiled roof and a central stone pillar. The building is surrounded by a wooden fence and is situated in a natural setting with trees and a mountain in the background.

村上義清を頂点として、主に北信濃に地盤を持つ武將一八人が勢揃いした集団肖像画。原本は江戸時代後期頃の制作と思われる。

村上義清を頂点として、主に北信濃に地盤を持つ武將一八人が勢揃いした集団肖像画。原本は江戸時代後期頃の制作と思われる。

村上義清 略年譜

文龜 元年（一五〇一） 三月一日。村上義清が生まれたとされる
大永 元年（一五二一） 十一月。武田信玄生まれる
享祿 三年（一五三〇） 一月。上杉謙信生まれる
天文一〇年（一五四一） 五月。海野平の戦い。義清、武田信虎・諏訪頼重と連合して、小県郡の海野棟綱、補津・矢沢氏に勝利する

天文一七年（一五四八） 二月一四日。上田原の戦いで義清、武田信玄を破る。武田方の板垣信方、甘利虎泰など戦死する。

同年 四月五日。義清、府中松本の小笠原長時・安曇郡の仁科盛政らと諏訪地方へ乱入する

同年 四月二五日。義清、佐久郡の内山城（佐久市）を放火し、城下を焼く

天文一九年（一五五〇） 八月末から一〇月初。砥石合戦で村上軍、武田軍を破る（信玄の砥石崩れ）

同年 一〇月九日。義清、佐久郡に進み岩村田（佐久市）を放火する

同年 一〇月二一日。小笠原長時、義清の支援を受けて深志城（松本市）奪還のため平瀬城（松本市）に進む

同年 一二月八日。義清、小諸に出陣し、同一三日には佐久郡野沢の桜井山城（佐久市）を攻め、城下を放火する

天文二〇年（一五五一） 五月二六日。砥石城が真田幸隆（幸綱）により落城する

同年 一〇月一四日。義清、安曇郡丹生子（大町市）に出兵し、この地を陥れる

天文二三年（一五五三） 四月九日。武田軍の侵攻により、義清、葛尾城を自落し、落ち延びる
四月二二日。義清を中心にしたと考えられる軍勢五千が武田軍と更級郡八幡（千曲市）

で戦う

同年 四月二三日。義清らの軍勢、葛尾城在城の武田方於曾源八郎を討ち取る
同年 六月九日。義清、諏訪大社上社の神長守矢氏に祈禱を依頼する

同年 八月五日。塩田城（上田市）に籠っていた義清、武田軍の再侵攻により城を自ら落とし、行方知れずとなる（越後の上杉謙信を頼ったとされる）

同年 八月末。九月。第一回川中島の戦い

天文二四年（一五五五） 四月。第二回川中島の戦い

弘治 三年（一五五七） 四月。第三回川中島の戦い

永祿 二年（一五五九） 十一月一三日。上洛から帰国した謙信に、義清をはじめとする信濃大名衆が祝儀の太刀などを献上する

永祿 四年（一五六一） 九月一〇日。第四回川中島の戦い。大激戦となり両軍多数の死者を出す

永祿 七年（一五六四） 二月一〇日。義清の子村上国清、謙信の取次ぎとして、飛驒江間家の河上式部少輔に書状を送る。この書状のなかで「老父」

義清が飛驒への取次ぎであったことがわかる

同年 七月末。一〇月。第五回川中島の戦い

永祿一二年（一五六九） 七月一七日。義清、謙信の取次ぎとして若林采女を通じて飛驒の河上式部丞へ書状を送る

元龜 四年（一五七三） 一月一日。義清、亡くなったとされる。終焉地は諸説あり定かなことはわからない

発行 坂城町・ステキさかき観光協会

◎問い合わせ先 坂城町役場 産業振興課

〒三八九一〇六九二 長野県埴科郡坂城町大字坂城一〇〇五〇

電話 〇二六八八二二二一

